

Sterling Stuckey, *African Culture and Melville's Art:
The Creative Process in*

Benito Cereno and Moby-Dick

New York: Oxford University Press, 2009. ix + 154pp.

齋木郁乃

Herman Melville 研究は1960年代を境に大きく変化した。60年代の市民権運動やベトナム反戦運動の影響を受け、人種差別や奴隷制度といった白人優越主義に基づく国家の暴力に対する Melville の批判的な視線に関心が集まるようになったのだ。そのような変化を最も端的に表しているのは中編小説 “Benito Cereno” 批評の変遷であろう。50年代までの “Benito Cereno” 批評は、船員を虐殺して奴隷船の主導権を握った黒人たちを悪の象徴と見なし、スペイン人船長 Cereno の命を救ったアメリカ人船長 Delano を英雄視していた。今となっては信じがたい解釈だが、“Benito Cereno” は白人を善、黒人を悪と単純に規定する人種差別主義的な小説として読まれていたのである。60年代以降、Melville の平水夫時代に育まれた人種観、すなわち社会的弱者の立場から権力を批判し、捕鯨船上や南太平洋の島々で出会った非キリスト教徒の人間性を率直に認めるリベラルな態度が明らかにされるにつれて、“Benito Cereno” もそのような人種観に沿って読み替えられることとなる。Melville の曖昧で巧みなレトリックに隠れて見えなかった、暴動の首謀者 Babo の白人を遥かに凌ぐ知性や暴動鎮圧後の彼の沈黙に秘められた支配者への無言の抵抗が読み解かれ、ステレオタイプ的な人種観に囚われて真実に盲目的な Delano の愚鈍さが批判的的となった。“Benito Cereno” は奴隷暴動に際して白人の人種差別主義者の心がどのように反応するかを描いているとした Carolyn L. Karcher や、San Domingo (ハイチ) の独立革命の影響を中心に新世界の奴隷の歴史の中に “Benito Cereno” を位置づけた Eric J. Sundquist はこの流れを汲んだ批評の典型である。

本書もまた、Melvilleの主要な作品である“Benito Cereno”と*Moby-Dick*を人種や奴隷制度を巡る歴史の中に位置づける試みの一つであると見なすことができるが、Melvilleの創作過程に着目し、作品とその情報源となった文献（Melville自身の他の作品も含む）との間テクスト的な影響関係を重視している点と、書かれたものだけでなく音楽やダンスといったパフォーマンスを間テクスト性に含めて考察している点に本書ならではの特徴がある。著者であるSterling Stuckeyは、アフリカ系アメリカ人の思想史・文化史を専門とする歴史家で、その著作には、19世紀に様々なルーツを持つ奴隷たちがいかにして共通の黒人文化を作り上げたかを論じた*Slave Culture: Nationalist Theory and the Foundation of Black America* (1987) や、アフリカ系アメリカ人の芸術がどれほどアメリカ文化を豊かにしてきたかをMelvilleやFrederick Douglass, Paul Robesonを通して論じた*Going Through the Storm: The Influence of African American Art in History* (1994) がある。本書は、*Going Through the Storm*で示されたStuckeyの芸術と歴史の関係についての強い関心を、Melvilleという一人の白人作家に与えたアフリカ文化の影響という形で具体化したものである。Melvilleの「際立って複雑で巧妙な創作技法」と「文化的思想と実践の柔軟性」に対するStuckeyの素朴で率直な驚嘆に端を発した本書は、Melvilleを「黒人文化の熱心な研究家」と見なし、Melvilleという19世紀のアメリカを代表する作家のアフリカ文化に対する理解の深さを示すことによって、アメリカ文化のアフリカ性をも論証しようとしている(3, 5)。

子ども時代のMelvilleのアフリカ文化体験に着目したのは、本書が初めてであろう。第1章は、Melvilleが幼少期を過ごしたNew York Cityと母の生まれ故郷であるAlbanyにいかにかアフリカ文化が深く根付いていたかを生き生きと描く。Stuckeyは、着飾った黒人たちが音楽に即興のダンスを合わせて街を練り歩くPinkster Festivalや1827年のNew York Emancipation Dayのパレードを見物する幼いMelvilleの姿を想像してみせ、黒人にとってだけでなく白人にとってもまたリング・ダンスやジューバといったアフリカ由来の独特のリズムに合わせたダンスが身近なものであったと指摘する。このようにしてMelvilleの心に刻まれたアフリカ文化が作品に取り込まれ、「黒人共同体を超え、それほど黒

人に好意的でないような人々をも驚嘆させる」例として、Stuckeyは*Moby-Dick*第40章“Midnight, Forecastle”を挙げる(31)。劇仕立てで様々な国籍のあらゆる人種の船員たちが登場するこの章で、黒人の少年Pipのタンバリンに合わせて多民族のリング・ダンスが繰り広げられるというStuckeyの解釈には説得力がある。

Melvilleのアフリカ文化の情報源として過去の批評が無視または軽視してきた文献を発掘しているのも、本書の重要なMelville研究への貢献である。第2章と第3章では、“Benito Cereno”に取り入れられたアシャンティー族の文化が²、Melvilleが10代の頃に読んだと推測されるJoseph Dupuisの*Journal of a Residence in Ashantee* (1824)に由来することを論じている。アフリカの王Atufalの人物造形を始めとして、斧磨きの黒人たちや船首楼で鳴る鐘などが、MelvilleがDupuisを読んで創作した痕跡として挙げられる。Stuckeyはまた、これまで“Benito Cereno”の種本とされ、Northwestern-Newberry版のAppendixとしても収載されているCaptain Amasa Delanoの*A Narrative of Voyages and Travels*第18章の代わりに第16章を本書のAppendixとし、“Benito Cereno”研究の常識に挑戦している。特に*Voyages and Travels*第16章に登場するDelanoの友人Captain George Howeの描写が³、“Benito Cereno”においてBaboがCerenoの顔に剃刀をあてる場面に酷似しているという指摘は、発見と呼ぶに値する。このようにMelvilleのアフリカ文化に対する認識の深さに着目した結果、StuckeyはMelvilleの作品同士のこれまで知られていなかった関連性を引き出すことにも成功している。例えば、“Benito Cereno”のAtufalは、Dupuisが描いた死の歌を歌うアシャンティー族の戦士との類似を通じて*Moby-Dick*のアフリカ系の銛打ちDaggooとつながるという指摘は、アフリカ文化を通じた両作品の間テキスト性を喝破している。

第4章は、近年同時代人として盛んに並べて論じられるようになったFrederick DouglassとMelvilleの影響関係を軸としている。この章自体、MelvilleとDouglassが属していた異なる社会空間を交錯させることで、より完全な19世紀の社会文化史を構築する試みであるRobert S. LevineとSamuel Otterの編集による論集*Frederick Douglass and Herman Melville: Essays in Relation* (2008)に寄稿さ

れた論文の再録である。Stuckeyはまず、Douglassの自伝三部作から「Douglassにとって、奴隷音楽の主要な美的特徴は喜びと悲しみが絶え間なく溶け合っていることである」と読み取る(84)。そして*Moby-Dick*におけるPipのタンバリンの「陰鬱かつ陽気な」調子や、Bachelor号の歓喜がPequod号の憂鬱を深める第115章にDouglassの影響を見るなど、*Moby-Dick*全体を通して流れるブルースを聴き取ると同時に、DouglassとMelville両者にとって「ブルースの比喩」が「国家の人種間の溝」を表していることを示す(98)。

以上のように、本書は著者の長年にわたるアフリカ系アメリカ人文化および歴史の研究成果とMelville作品の精緻な読みの出会いにより生まれた画期的な研究書であると評価できるが、残念ながらいくつかの瑕疵もある。Robert K. Wallaceも指摘しているように、優れた研究書を読む際にはまずIntroductionで議論の枠組みを知ることが期待されるが、本書のIntroductionでは、過去の批評家に対する批判と著者がこれから本文中で展開しようとする議論の正当性が論拠のないままに(論拠を本文に持ち越したままで)繰り返され、読者を戸惑わせる。しかも、Stuckeyが批判の対象とするMelville研究は1920年代から60年代前半までに発表されたものに限られており、冒頭で述べたMelville研究史の変遷を鑑みるとむしろ60年代以降の研究の流れの中にこそ本書を位置づける姿勢が必要ではなかったかと思われる。また、Stuckeyが新たに指摘した“Benito Cereno”や*Moby-Dick*の創作過程で用いられたとされるテキストや音楽やダンスの多くが、Melvilleが「読んだであろう」「見聞きしたかもしれない」とStuckeyが推測しているにすぎないものであることは、Melville研究の可能性を広げる上ではやむを得ない一方で、実証性を重んじる研究者にとっては物足りなく感じられるかもしれない。

参考文献

- Karcher, Carolyn L. *Shadow over the Promised Land: Slavery, Race, and Violence in Melville's America*. Baton Rouge: Louisiana State UP, 1980.
- Sundquist, Eric J. *To Wake the Nations: Race in the Making of American Literature*. Cambridge:

Harvard UP, 1993.

Wallace, Robert K. Rev. of *Cannibal Old Me: Spoken Sources in Melville's Early Works*, by Mary K. Bercaw, and *African Culture and Melville's Art: The Creative Process in Benito Cereno and Moby-Dick*, by Sterling Stuckey. *American Literature* 82.1 (2010): 190–92.